

# 小橋の墓

黒崎貞枝

課せられた墓話は甚だハカの行かぬ問題で且つ我等の筆の運びも頗る捗々しからぬが、我住む近きあたりは昔時流行した盆の七墓参り（三年續くれば自分の葬式に雨降らぬとの迷信は表面で實は夜通し歩行き廻るが面白さに浮かされたもの）の一ヶ處なる小橋（おばせ）にあたりはするが今は人家建並びて其偉さへさらになきを古老やら舊記を訪ねて有りし世の様を誌るし且は其附近寺々に訪碑録等に現はれぬ墓どもを探りて實を塞ぐことにする。

劈頭から餘談にわたりて恐入るが我等の住む八丁目東寺町テナ處は天下一品で又しても東寺町八丁目と御叮嚀に直して下さる方が多く爲にしばし受信が遅れたり或は不着に終ることありはせぬかと不安に暮らして居ります、併し此稱呼も古く難波戦記時代に八丁目とあるとかでムザムザ變更せられぬそうです、夫れにしても現在世界を匍伏せしめつゝあるメイドイン、グレート大阪の下眞中東區内に瓦斯管の敷設して居らぬといへば嘘だらうと云はれるが事實なる事ほど左様に浮世離れのした一區劃なので有ります、管々しく無駄をつらねて済みませんが墓に縁ある寺町のことなればお辛棒を願ひます。

さて本題の小橋といふ稱呼は往昔大小橋命の御座所の唱えから

習ったものらしく、墓のあつた所は現在天王寺區高津北の町の北隅で寺一つ隔て、接続する東區八丁目東寺町から南へ突出した小丘陵で東西南三方共登り坂で圍まれた一廓が小橋の山味で、下の東の平丘今は埋めて市街となつた味原池につゞき、明治の中頃まで喧しかつた城南大桃林の中心地で花時の盛観は今尚吾人を偲ばしめる。

山味は前掲略圖の如きもので南方中央北向きに霽蔭堂があり此後ろが灰山であつた其前西向きに立派な寺院があり此寺は明治七年頃他へ賣却し持主の僧某は何處かへ行つて仕舞ふた、西南隅に高野山の遙拜所といふのが有つて遠く南山を拜する場所の有りと寺の北東に池があり其前の辻角に何佛か覺えぬが巨大な碑石が建つて居た、そこを西へ上本町五丁目停留所筋へ出る處に現在丸一食堂の西に毎月大師巡りの日に接待茶を出して居る、平屋の三軒續きの一流れの長屋は昔の茶所即ち今の葬儀受付休息所であつたその向ひにも同様の家今の小林寫眞館の並びも同じ茶所で此茶所の後ろ南手の崖の下が池で蓮の花の盛りには葬式戻りの觀賞客も多かつたと、此茶所北側は淺野、南側は小谷といふて何れも大工の棟領でありしと、此淺野氏の軒下に四時香花の絶えぬ朝日地藏さんがある此地藏さんは此家の前から掘出され淺野さんがお祭りを初められたので、さまで古るき由緒のあるものでないといふ龍馬堂と寺の周圍は墓で包まれて居たことは言ふ迄もないが、維新の始め火葬は佛徒の所爲なりとて一時廢せられ長柄、阿部野、岩崎の三開所と共に他所の埋葬が廢せられ同時に火葬も復活されたが其時に此小橋は全廢せられ爾來墓石は銘々所縁の地へ引移し

残りたるものを一纏めにして西側の崖の上にかためしが、去る大正三年爰より一丁斗り北の十萬寺へ改葬し無縁塔を建設し毎年盆には聯合有志が讀經法事を行ふて居る、(後に十萬寺項に詳説)

此高燥な小丘の景勝地に今尚二ヶ所の廣漠な空地が残つて居る人の噂では爰を堀ると埋没したものが現はれるので未だに手を附けぬのであるといふ。

この小橋山味の外に元味原池の東南隅堤防の内側に面して二十基斗りの小墓地があつた、これは山小橋の二十戸斗りの村民のもので古圖によると小橋と混同して居るものもあるから特記して置く、此墓も大正七年六月同處北の大圓寺に移し小さき六地藏と數基の墓を寄せて元小橋無縁塔と題してある。その小無縁墓と共に池邊に寂しく立つて居た巨大石碑も今は此寺の本堂前に移建せられてある是こそ比賣許曾祠の復興再傳に一生を盡された律師聖觀の碑である詳しくは訪碑録にあればついて見られたし。

さて墓地には附物の心中沙汰がこゝにも御多分にもれずある、それは坊主心中として一寸類例の乏しいもので、門徒坊主が女郎と首つり心中をやつたもので其書置が頗る振つて居る、明和雜記の一節から書抜けばさつと下記の如し。

谷町藤の棚に重願寺といふ道場の伴僧了山は籠屋町邊の髮結蒲助の伴で生れつき經學を好み能く石印を彫刻し灑已と號し秀才であつたが、難波新地の女郎お千代と馴染を重ねたお千代は深くなるまゝ外の勤も身にそまらず自然親方受けも悪く止むを得ず北の梅ヶ枝新地に仕替にせられた、こゝでも了山の噂高く遂に又遠國

に了山何事も心にまかせぬが世の常なれば勤大事につゝしめと意見を加えしもお千代としては内外つらき事のみ重なり行くに果ては兩人覺悟を究め明和三年二月廿九日の夜おはせに至りはたか寺(此寺未考證)邊のいざり松の枝に二人共首絞め死しけり、衣類脱ぎて傍なる枝にかけ一書を残したり其寫

余本願寺宗なれば妻帯すること世の常なり故に妻をむかへて婚姻の時袈裟衣を着して夫婦の縁を結ぶ然れば我宗は法衣にして是禮服なり勿論魚肉常に食す其法儀に於ては王法を本として他力の本願として天地陰陽の道を守りて妻縁をもとめ子孫を残し世法をおさむ是歸命無量也則祖師親鸞聖人の教にして天下第一の御法なりかくのごとき行者了山今女房ちよを導きて彌陀の淨土に至る來れ

鳴かぬからす娘の衣の雲雀笛と書殘して空しくなりけり、學友等あはれみて了山存世中よく石印を刻したれば三尺六寸に一尺二寸の蠟石碑を作り釋灑已之墓と彫り裏に碑銘をきざむ此塚は野堂町邊の寺中に有よし施主玉東明、分つた様な分らぬ辯筆なんほうおかしき心中物語ならずや。

此外に嵐三右衛門一座におぼせ心中と外題のみを掲げたるものあれども其要を詳にせず惜しき事なり、小橋の墓始つて以來寛政八年嵐小六の葬式は諷經三十ヶ寺文政六年玉造の萬屋お勘(よろ勘とて現在佐々木氏の先祖)葬禮には諷經二十五ヶ寺此二度の葬禮も後にも前にもない建儀なりしと。

忠兵衛の花立石には片岡我輩、梅川には片岡東吉とあり、傍らに句碑「うゑそへて比賣にしたり有未の花」十一代目我輩とあつて前にありし忠兵衛の隣りへ墓を立活えたことが判る、又別に連理ともなれかし梅に松の枝

寶丹元祖精進堂 今宮十萬寺起立 六十翁三甫

梅川忠兵衛墓(傳光寺境内)



の句碑あり、これは心齋橋筋の山本勉強堂主の建てしものと思はる。

本堂正面に一丈有餘の御影の大石碑に、しかも全部見事な深彫で好酒院酌盃狸々居士

是から小橋寺町と普通唱えらるゝ附近の寺、この墓場中から一節ありそう、これはと愚老の眼に映したるものを雅俗の差別なく書留ることにする、夫につきても驚異歎服措かざるものは。木村篤處翁の努力の賜物訪碑録のことで、實に至れり盡せりて、翁の如き至誠至純の人に非ずんば成し得難き大事業である、此身親しく實地につきほとゝ感激せしめらるゝ、翁の如きは我大阪に取つて實に、國寶的存在人物として推尊するものである。其訪碑録に漏れたるものとは云はぬが、翁が捨てられた屑と云へば故人には濟まぬが拾ひ集めることにしたが、元より低級な愚識による誹りは甘受する。

さて山味に最も近き傳光寺から始める、此寺は今より百七八十年前現所に移つたもので夫迄は墓地の東南隅、現白髮染屋の八田氏等の所に在つたもので、其頃今の寺地は越前築山と稱した荒蕪地で、慶元の頃越前少將忠直或は伊達羽柴越前少將政宗が、構築した陣地であつて、後にいふ慶傳寺(北向地藏)の南側舊騎兵隊添ひの丘地が加賀築山とて、是も同じ頃の陣地があつたのを古地圖等には相互混同交互したものあれども私は本説を取る。

誰もが通りすがりによく眼につく、梅川忠兵衛の碑、例の角倉氏の標石のあるかど寺が即ち傳光寺で、この梅忠の碑は本堂前小築山の中にあつて、小さき石塔に

妙法頓覺利達 右安永七庚寅十二月五日  
左俗名藤屋忠兵衛

小橋の墓

横に 我も又客となる身や魂祭  
一方に 本國東都産前田金兵衛菅原政盛墓

裏に專譽妙念禪定尼外六名の家族らしき法名を二段に列刻し、年月は更に記入なし、思ふに、有福な勤番武士らしく、戯れの酒呑塚も随分たてれども如此堂々たるものは珍らし、其後手に二尺四五寸角の土蔵の如く、漆喰で塗り固め四隅を立山石で囲み、屋根は普通の如く、別焼の小形瓦で四方葺になし内は破れ瓦を心にしたのが毀れから見えてある、正面短冊形に嵌め込んだ青石には只だ単に貞順婦人之墓とあるのみ、何れは多少支那かぶれの儒家關係のものらしいが、其構造の珍なものを掲げて置く。

本門入口脇扉際の一隅に珍墓を三つ並べある、少さき菰樽形に劔菱を輪廓とし、酒好猪口樂信士文政七年八月廿七日其隣に自然石に

白狸塚

其次に三尺餘りの青石にて模造釣鐘墓の正面に

淨慶法子

所縁山庄太郎

左右に 馬の九十郎、七つ島惣四郎 文化六年十二月 日

世話人今出川權右衛門、石川忠七とあるもの何れは顔役か角力らしいが、寺男の斬では、此碑を建て、多くの寄進を集めた跡に大悶着があつたと。

北の小門の外に一本の標石あり正面に

だいしめくりとをりぬけ

側面の上に琴柱と般の繪を冠し

位の隅刻小地蔵尊の左右に、八四、〇〇〇碑の内五三七三十番と陰刻したものである。無論八萬四千駄の其一らしく、施主は橋高こう明治三十四年十月と裏に記せり、其が實數なれば奇特の至りである。天王寺の六萬駄は何んでもない事になる。又表門から見付の庫裏脇に立派な紀州の自然石に

慈母壽藏

初代小文枝

月雪にはなもとおもふ齡かな

裏に橋本氏先祖代々及び左右法名いくつも、横に明治辛丑夏と刻んだのがある。又塀添に北側三世桂文枝之碑橋本氏横に

我友軒譽譽雀年性瑞居士

明治四十三年十二月廿四日發

とあり、小文枝の橋本氏と赤の他人か或は關係ありや、又此西の方に花立に柱文枝とせるあり、此墓も何か所縁あるものならんも法名多く連ぬるのみにて俗名知りがたし。

東北隅に

樂邸恭安居士月土葬 紀州熊野 新宮伊澤氏

と特に土葬二字太く刻みたる點後を慮つて、深き意味を寓したるなるべし。

佛心寺の入つた門際に三羽千鳥の紋下に

玄覺道寛信士(台石)

光室利照信女

二代目

山下八百藏

裏に 文化九壬申五月建立

左右には藏の字崩しの紋の下に、澤山の法名を列刻してある。

小橋の墓

とある一見遊女か何かのものと見ゆるが、又の側面最下部に松の一字があるので、漸く合點し得たのは、白縁齋の浪花の梅に此寺に松の名木あつて住吉の笠松、攝津名所圖會大成にも唐崎の松にも劣らぬ云々あるのが此事であろう、夫にしても琴柱と撥との譯が不明。

此寺の筋向ひを龍泉寺といふ、尼寺が建築中で昨今外構えの塀廻りの工事最中で近く竣工するであらうが、こゝはタツタ一人の七十過ぎた尼僧の住持するもので、常には白藏主の如き身なりで毎夕何れへか出掛けるが、この新築の構造は實に見事なもので、本堂に續く方丈ともいふべきものは、逆も立派で頓ては何かの會衆にも應せられる如く見え、其續きに二戸の借家さへ付屬して居る、尤も板圍ひしてから我等の見てから既に二十幾年かゝつて居る、一見貧し氣に見ゆる尼僧一人の腕で、斯の如き建設は實に見上げたものと、俗人共は瞠目して居る。墓に關係ない今時に珍らしき奇特な尼公の事を附記して置く。

此寺と傳光寺は古き地圖には無いが、こゝで高津北の町は終り隣りが直ぐ八丁目東寺町寶樹寺に續くのである。

此寺の本堂脇に俄師團十郎の弟子らしき鶴屋團藏、明治四十年十月廿九日世話人、尾崎橋松、寺井孫次郎、赤木丑松、井上巖と連記したのである。又三代目大悶太夫

宣暢院譽譽流音居士

明治四十一年八月井上重吉建といふのがある。

金慶院には福聚地蔵尊とて六尺近き、極彩色の尊像が立

夫から正面に巨大な位牌形の碑に

竹風軒露月善士

左右に父母子女等の法名を刻し、裏に慶應三丁卯七月十一日前橋の柱には大和屋竹四郎とあり、是は上町に於ける一代の長者重春氏の壽碑なるが、今は參る人もなしといふ。

十萬寺これが小橋の無縁墓を合葬した寺で、奥の方に常の如く四角く山形に重積してある玉垣の左りに改葬無縁塔、右に小橋エタガマ(墓地と木崎好尚君の筆の石柱が立つて居る。エタガマといふ稱呼は(未考證)わざと假名に書かれし點が頗る意味深長に感ぜらるゝ、其前に改葬の碑銘が左の如く同君の名文達筆で建設してある。

小橋墓地合梅田濱原蒲生千日飛田古所謂大阪七墓之一也今編入千東區高津北町近關地構屋壘域日暨聯合區民痛之歲十一月廿五日行供養新移墓於十萬寺寄金壹百五拾圓代資香火中有佛足石大和藥師寺物寶劔雙魚瓶螺千福輪相梵王項相悉具今謹勸 光明皇后佛跡咏讚之什載拾遺和歌集而刻藥師寺歌碑者樹之墓道以寓三十二相八十種好具足之人濟度衆生意庶乎累々墓下靈魂長享涅槃寂靜之樂矣

大正三年歲次甲寅十二月十一日

清堀木崎愛吉撰並書

此左側に文中の見事なる佛足石を安置し、又玉垣を結び其奥に一碑を建て表面に藥師の座像を微細に陰刻し、裏面に御歌

夜蘇知阿麻利布多都力加多知夜蘇久佐等曾大禮留比止乃布美志

阿止止巴呂麻禮爾母阿留可毛  
 とこゝにあるべき名碑を如何にしてか人目にかゝらぬ無縁塔の  
 後ろに押し遣り、あらぬセメント固めの観音像と換置しあるは沙  
 汰の限りなり、積上げたる絶頂の直下に一小碑を置き、これは  
 珍らしき中田三郎兵衛といふ人の墓誌銘で左記文中にある如く遺  
 骨と共に土中深く、石櫃に埋めたるもので即ち傳光寺の移轉前の  
 ものなりしことを知らる。

家君中田三郎兵衛重政攝津東成郡天満人考七郎左衛門重光母増  
 池氏娶同郡岩井氏女生男重定次重基女艶等以延寶三申寅季十一  
 月十有三日卒歳五十八葬於西成郡大坂之陽男重定卜地處遷墓末  
 果以今年七月三日卒孫龜傳三郎等繼亡父之志今乃元録九丙子年  
 八月二十一日聚集先君舊墓土納石櫃改葬東成郡小橋傳光寺孫等  
 不絶哀痛敢竊刻板中如此吳天門極嗚呼痛哉  
 正面下邊に積まれたる一墓石に

双無一劍信士 寶曆九丁卯年二月廿三日

とあり、血腥さに書留たるが、偶然これは、生玉馬場先の藝子  
 道具屋まつといふものを殺害した 谷町三丁目平野屋虎藏が記日  
 に處刑されたものなることが判明した。然し其殺害した理由に至  
 つては乍遺憾審らかにせず無論知情結果であらう。  
 又最一つの無縁墓に考妣塔といふ文字丈の墓が見える餘りの簡  
 單を極めたものである。

寺の座敷の庭先に一小五輪形の石塔を置いてある、寺僧の曰く  
 これは近年發掘したもので、慶長元年十月□□日有念とあり古體  
 具少年の會通に從事せられ、近來五層二層を築造し、世界の愚人  
 として仰がれて居るが、何やら其前を通ると氣世話しき心地のす  
 るのは妙である。こゝには四代綱太夫の墓があり又無縁の累積し  
 た中に

毛脱幼尖靈  
 毛轉脱毛靈

としたのが見える、著類かも知れぬが頗る珍である。  
 餌差町に廻つて、かの契沖の圓珠庵の向ひに眞言尼寺の觀音院  
 がある。大師巡りの開祖月海上人といふ有名な碑石が寺の正面に  
 巍然と建つて居る。其墓には延享三丙寅九月九日鹽山氏と印し、  
 石の玉垣には經文めく文字が刻んであるので聞いて見ると四十九  
 院といふので、よく見ると四方の角柱の兩外部には

- 菩提樹下成佛塔、菩提樹中法輪塔、淨觀天宮生處塔、曲女城邊寶院塔、
- 善羅樹山股若塔、鹿野園中法輪塔、淨觀天宮生處塔、曲女城邊寶院塔、
- 善羅樹山股若塔、鹿野園中法輪塔、淨觀天宮生處塔、曲女城邊寶院塔、

と彫み其間の各小柱には常行律儀院、恒說華嚴院等々四十九院  
 並んで居る。これは彌勒菩薩の兜卒天の守護八塔四十九箇院に擬  
 するもので俗に中院四十九日と唱ふるのは是によるものとぞ。

夫からドンドロ坂の小口まん直し地蔵のある心眼寺 此寺の後は  
 眞田山陸軍墓地に密接し、紋處は六文錢おマケに眞田軍中藥とい  
 ふ疵薬を賣つて居て、幸村の子息幸定とやらの位牌ありといふの  
 で尋ねたが何等依る處なく一切不得要領で明記し難し。

次が興徳寺こゝの無縁塔中に、相州竹本相模太夫の墓があり  
 又彌太夫と並んで

竹本筆太夫 文化十四年二月二十五日

拘すべきものである。  
 此寺の門に貼紙した小橋持の石とは、前記佛足石のことでこれ  
 は山味の興臺であつたもので、腰を椅れば痔疾に特效ありと信ぜ  
 るゝによるなりと。

天龍院こゝには北向の不動で名高き丈餘の大石の不動尊がある  
 これは醫者の入江某の建てたもので、其容貌が如何にも寫生的に  
 岩丈な老婦なるは其人を模したものでらしい、周邊の結構中々行届  
 き、香盤には文政十丁亥年建之先達天王寺屋安兵衛とあり。二本  
 の標石の一は日本退三神流一は元祖入江先生塚とあり。彼の太平  
 寺の北山不動に比して、山的で例の兜巾鈴懸け姿の護摩焚き流と  
 思はれるが、一時は盛んに發行したものでらしい。珍らしく思われ  
 る墓としては

辰木火土金水 左右に  
 平田源誠豊久墓 正寶淨因居士  
 安永四年九月初六日

といふのがある。これらは多分卜占家のものならん、本堂前  
 に芝居關係の立派なものが多く、さりとて古きものはない、料理  
 やの南吉前田氏、仕打の二代目錢谷清七、最も目をひくのは新し  
 き喜劇の曾我酒家兄弟ので、五郎氏は現存なので無論壽碑である  
 が、この兄弟が紋處として千鳥に蝶を用ひて居ことは周知のこと  
 ながら、十郎の法名は實松院安譽祐成。信士とは笑はされる、五郎  
 君のも定めて實松院安作時致信士とでも云はれるか、又其奥に曾  
 我酒家十次郎のがある。是は又師の後ろ三尺去つてと記して居る  
 のもまじめでおかし。

其右に門前山通刻して居る。  
 大願寺こゝは兼葭堂や森川竹窓よりは、暖のおん婆さんで聞え  
 て居る。此おん婆さんは中々銘品で立派な彫刻であるが、これは  
 元初めに記した、小橋茶毘所の寺にあつたもので、彼の寺賣却の  
 際安の和尚が焰魔さんやら、不動さんやらと共に貰ひ受けた三途  
 川のおん婆さんで長く本堂の脇に轉ろけて居たのが、いつの間に  
 やら暖を治す名醫となつて大變流行して居る、一寸其原籍を洗つ  
 て置く、されば其傍に安置してある焰魔の姿を見ても同様に首肯  
 さるゝ名作である。

序に其隣り傳長寺の撫で地藏尊、これは又三尺斗りの丸石の座  
 像で是も元は泉州堺の引接寺にあつたものであるが、其寺の構中  
 道光といふ人の夢枕にしはく立せ給ふにより、天保九年此寺へ  
 遷座して爾來六道能化延命の御誓あらたかなりと奉額に示してあ  
 る。

此寺には山陽碑名下筆の儒者の墓等立派なもの三基もあるが、  
 夫れは訪碑線にあるので除く、本堂の脇に大阪新小屋の大席平野  
 町此花館堀江の賑江亭等の席主藤原氏の立派な墓がある。

重願院本譽關明助心禪定門  
 明治三十九年十一月十九日

其外一門らしきもの三基並ぶ、其後ろに深刻の見事な  
 でん安の墓

伊丹屋傳兵衛弘化四丁未七月  
 臺石に身内中としたものがある、これは神農會の元祖會長で其

小橋の墓

會が近くまで派を利かして居た夜店出しの場割の親方であつた。  
成道寺こゝは主夜神さんよりか、擧げてぬすつとの神さんで通  
つて居る、色々の奉額あれども心を取られるものがないのは仕合  
せ、墓地の入口に  
坂東彦三郎墓  
妻 貞尼知淨

刀根長兵衛建立と大きな石碑がある、其左右にも刀根家のもの  
が並んである之は妻の家から立たもので、本當のは生玉淨運寺に  
ありといふ、兎に角立派のものなり。裏の方に表面に細篆美しく  
上田加直之墓  
天明五年八月廿日

諱加直字平作小名伴三郎者法橋友石次男也性質剛強廉直而人愛  
之幼時頗健及稍長一旦遭篤疾請洛醫吉益氏治而癒爾後唯事結佛  
緣至壯年陰抱厭俗之志嘗自書寫法華經百餘部特瞻禮三十三所薩  
陀福地暨四方靈場盡納焉專留心於勝□有通氣自試之態一日詣中  
山寺寒天冒雨通齋誦普門品登高野則深夜獨步入奥院當堂前念誦  
連晨又爲疫死萬靈與大碓於千日化人場痊經八千卷供其冥福也人  
咸以爲希有常務精齋不食肉日但二餐亡天明五歲在乙巳仲秋暴罹  
疾而不出三日八月二十日遂卒々時心神不亂而瞑目享年三十有八  
法號教友妄牟岐氏有二男兒尙幼余欲使夫二孤作後嗣之孝爲之立  
碑於荒陵側龍泉禪寺姑記亡弟始末如是  
長兄香草揮涕書

最難毒門の直ぐ處に古き板碑あり、肥州石らしき青みの石に  
南無阿彌陀佛  
と彫刻したり、一見鎌倉時代と見らるゝ珍碑曾て是は好尚木崎  
君によつて雑石中より發見され、爰に移置せしものなりといふ。  
こゝにも裏手一段低き雑草中に一區を劃して  
松浦東鶴居士文政八年乙酉建之  
と一列に

怡奇茂齋、東渠居士、東嶺居士、其他婦人ものものと數基立て  
りこれは方相家の大家で一時東鶴館として數多弟子を養ひ明誠舎の  
豊田氏とは最も親密の關係ありしと遺族は上本町九丁目あたり  
居られたが今は參られぬと。

大圓寺は初めに記した山小橋の無縁墓を合葬した處で小形な六  
地藏を上据え十基斗りを積み標石に元小橋無縁塔大正七年六月  
改葬と誌せり、こゝに特記したきは本堂前の聖觀律師の大碑であ  
る。私は先年之を味原池畔で一見した後埋立られて何れへ往きし  
かと搜索して居たものが茲に發見再會したこと欣喜の情を述べ  
て置く。

慶傳寺こゝは北向の地藏で知られて居る此地藏尊元と寺の前の  
西へ下りる小路高津中學校の東門筋の上に北向に立たせられ臺石  
正面中央に法界右十三番（野中觀音）くわんおんみちと割出し横  
に左おぼせ、このむら、ひらのと刻し一方の横に享保廿一年四月廿  
五日施主釋了清とありて全く道しるべの御地藏尊さんであつたも  
のを明治三十六年博覽會の年此邊一體大阪市に運入せられ市中の

小橋の墓

るものと知る。

寶國寺こゝには日本三基の一と云はるゝ唐の龍興寺石刻阿彌陀  
經の大碑あり、此碑の傳來は遠く平重盛が唐へ請經せしが、其死  
後渡來し、既に世は鎌倉と替り、これは其碑は筑前宗像宮に納  
めたりしに始まる。重盛の孫師盛の子勢觀房は圓光大師の高弟に  
して、百萬遍の第二世となり曾祖の志を果さんとて宗像神社のも  
のを模作し同寺に建立現在せり、又此寶國寺の七世順的和尙が再  
模建設せられたのが正徳五年乙未八月である。正面圓相中に彌陀  
の座相を刻し、上部及び裏面に經文を鏤刻したもので、此に誌し  
た阿彌陀經は、從來本朝に渉りたるものに比し一心不亂の次に專  
持名號以稱名故諸罪消滅即是多善根福德因緣の二十一字が多いの  
で古來宗門間で奇として傳へられる是に關し法然上人卓見説あれ  
ども茲には略す。

裏手一段下の畑の中に  
退翁先生墓  
退翁先生諱儀賢字先妄姓藤原氏中野始號敬齋後號退翁產干伊豫  
新谷壯年遷于浪華業醫明和元年甲申八月二十七日終壽七十葬干  
攝城南寶國寺  
傍らに相並んで  
妻 貞芳及  
兩親 顯考可圓  
守 心

遺跡に地蔵が立つて居るは不都合と其筋で言はるゝので現住僧本  
師が其寺内、北向の樓安置せられたもので爾來諸人の參詣するし  
く何時も子供連れの婦人等の跡が絶へたことがないお地藏さんも  
何が仕合せになるか分らない、彼の近松の名文會根崎心中觀音廻  
りの内に「是ぞ小橋の興徳寺、四方に詠めの果しく西に船路の  
海深く、波の淡路に消えずも通ふ沖の汐風身にしむ鷗、なれも無  
常の煙りにむせぶ色にこがれて死なふなら、しんぞ此身はなり次  
第、さて實によい廣傳寺縁に引かれて又いつかこゝに高津の遍明  
院（野中觀音）」云々とあり。

此寺の大檀那は板屋橋南詰の板屋孫兵衛板孫とて大材木屋大の  
富限者で我家の前にお手の物で板屋橋を架けたり、黄檗の某大徳  
が筆記せし代々の釋名書が此寺の寶物として納まつて居るといふ、  
此邊迄も古は天王寺の所管で吉右衛門肝煎地であつたといふ、  
又發掘したといふ殖版、攝津名所圖繪其他で喧傳せられた高津皇  
居、白鴨池、等由良宮の武夫鷹など、歴記したものは我等の凡眼  
でも怪しく映するのに、尙御殿谷と唱えるから皇居跡といふに至  
つては直ちに首肯しかぬる、都の内であつたとならばさもありが  
んか終りに臨みて寺門外に走つたを悔ゆ。

さて長々と書立てたが小橋墓地關係は尙八丁目中寺町及び上本  
町四五丁目にもあれども此度はこれにて擷筆す、切の約に遅れ徹  
宵之を記す最後に本稿を草するにあたり慶傳寺の岩本諦圓師並び  
に益友佐古商學士の指導に依ること多きを謝す。